

4 両生類

両生類相の概要

両生類は、古生代デボン紀後期に出現したとされ、陸上生活を始めた最初の脊椎動物である。体は鱗や毛などがなく裸で、皮膚でも呼吸するため完全に水から離れて生活できない。基本的には、寒天質につつまれた卵を水中に産み、幼生は鰓で呼吸し水中生活をし、変態後は肺で呼吸し陸上生活を始める。

岡山県では現在までに22種の両生類が確認されている。2009年の岡山県版レッドデータブック発行後新たに追加された種は、Yoshikawaほか（2013）によるシコクハコネサンショウウオである。Matsuiほか（2019）によるカスミサンショウウオ種群の分類見直しにより、従来カスミサンショウウオ低地型、カスミサンショウウオ高地型とされていたものがそれぞれセトウチサンショウウオ、ヒバサンショウウオとされた。サンショウウオ目ではサンショウウオ科6種、オオサンショウウオ科1種、イモリ科1種の計8種、カエル目ではヒキガエル科1種、アマガエル科1種、アカガエル科8種、ヌマガエル科1種、アオガエル科3種の計14種である。

岡山県は南から北に向かって、瀬戸内海、岡山平野、瀬戸内丘陵、吉備高原、中国山地と階段状に標高が高まっていく。南部は温暖で少雨、北部にいくにつれて寒冷で多雨となる。岡山県のほぼ全域に分布するものとしてはアカハライモリ、ニホンヒキガエル、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、トノサマガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエルが挙げられる。南部の岡山平野ではヌマガエル、帰化種のウシガエルが多く、場所は限定されるもののナゴヤダルマガエル（ダルマガエル）を見ることができる。瀬戸内丘陵ではアカハライモリ、セトウチサンショウウオ、シュレーゲルアオガエルも見られ、中部以北の吉備高原から中国山地にかけてはヤマアカガエル、タゴガエル、モリアオガエル、カジカガエルなどが加わるが、一部地域では南部にもモリアオガエルが確認される。北部の中国山地ではヤマアカガエル、タゴガエルなどが多く、県境近くの山地溪流付近にはナガラタゴガエルをはじめ、ヒバサンショウウオ、チュウゴクブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、シコクハコネサンショウウオが、小河川にはオオサンショウウオが生息している。

選定種の状況

幸いにも姿を消した種は見られない。両生類全体における生息基盤の脆弱さ、個体数の減少などを考慮・検討し、カテゴリーの見直しを行なった。

両生類は一生のうち水中と陸上という2つの異なる環境で生活するため、これら双方の生息環境の悪化が種の存続にとって脅威となる。特に卵から幼生までの時期を過ごす水環境は重要である。前述の22種のうち実に16種がいずれかのランクに入ったことは、近年の環境の悪化が両生類を危機的な状況に追い込んでいることを物語っている。

サンショウウオ目では、セトウチサンショウウオは、分布域は広いものの生息場所は極めて限定されており、水田の耕作放棄や開発などによる産卵場所の減少により急速にその数を減らしており、絶滅危惧Ⅰ類とした。オオサンショウウオは生息場所や産卵場所の減少などに伴って生息数が極めて少なくなっているため絶滅危惧Ⅰ類とした。山地溪流以外に中部の里地に近い所にも生息のあるチュウゴクブチサンショウウオについては、土地造成や各種開発の影響を受け人知れず絶滅する可能性があり、絶滅危惧Ⅱ類とした。ヒダサンショウウオは山地溪流に比較的広く分布するが、生息環境の大幅な改変によりその数を減らしており、絶滅危惧Ⅱ類とした。ハコネサ

ンショウウオは北部山地溪流付近に分布域が限られているが、森林伐採や林道開発、河川改修などの影響を受け、今後も減少していく要素をもっているため準絶滅危惧とした。アカハライモリは特に岡山県南部での減少が著しいため準絶滅危惧とした。ヒバサンショウウオは中国山地の脊梁部とその周辺の一部で局所的に生息が確認されているが、今後のさらなる調査精査が必要であり、情報不足とした。シコクハコネサンショウウオは、県内では1か所のみで生息が確認されており、実態の把握には今後の精査を要するため情報不足とした。

カエル目では、ナゴヤダルマガエル（ダルマガエル）は本来の生息地である低湿地帯の減少、さらにその代替地である水田のほ場整備などによる水田の乾田化と田溝の変容によって生息地、生息数ともに激減していることから絶滅危惧Ⅰ類とした。2007年11月に岡山県内では初めてその生息が確認されたナガレタゴガエルについても、その生息地は極めて局所的で個体数もわずかであり、森林伐採、河川改修などによりまたたく間に消失する可能性があることから絶滅危惧Ⅰ類とした。ニホンヒキガエルは、特に岡山県南部で生息場所や産卵場所が消滅し、減少が著しく、またモリアオガエルは県中北部に加えて南部にもわずかであるが生息地が認められるものの、産卵適地が減少していることから絶滅危惧Ⅱ類とした。カジカガエルは河川改修などによる環境の悪化により減少しているため準絶滅危惧とした。タゴガエルは山地溪流付近に分布域が限られており、またトノサマガエルは産卵場所として重要な役割を果たしていた苗代がつかられなくなるなど、農業形態の急速な変化により特に県南部の平野部で激減していること、さらにシュレーゲルアオガエルは生息地である湿地や水田の変容により今後減少していく可能性を持っていることからこれら3種については準絶滅危惧とした。

今回指定種としなかったニホンアカガエルとヤマアカガエルは、絶滅危惧Ⅰ類としたセトウチサンショウウオと同所的に似かよった環境下に生息しており、これらの種については今後も継続的に同様な観察が必要と思われる。

環境の変化を大きく受けるこれら両生類については今後も日常的に注視していく必要があり、予断を許さない。

なお、このたびのレッドデータブックの両生類の項について、一部に情報不足の種があることと、種の保護のため分布情報図については非公開とした。

（江田伸司・山田 勝・伊藤邦夫）

セトウチサンショウウオ*Hynobius setouchi* Matsui, Okawa, Tanabe et Misawa, 2019

有尾目 サンショウウオ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：未確定

選定理由

岡山県内では、丘陵地から低山の林床に生息し、晩冬から早春にかけて止水中で産卵するが、近年農業従事者の高齢化による耕作放棄や、それに伴う遷移の進行による水場の乾燥化、土地造成、圃場整備、各種開発などに伴い多くの生息地が失われ、存続への危機を招いている。

形態

小型の止水性サンショウウオで、全長70 mm～130 mm前後。背面の体色は淡灰褐色、暗褐色で細かい斑紋のあるものもいる。体側には地衣状斑紋があり、尾の上・下縁が黄色く縁どられることが多い。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、和歌山県・大阪府・兵庫県・岡山県・香川県・徳島県に分布する。岡山県内では、県南部から中部と北部の一部にかけて比較的広く分布する。

生息状況

繁殖期は12月下旬から3月下旬で、山際の穏やかな流れのある止水に産卵するが、一部小さな沢を利用するところもある。卵は、1対のパナナ状又はコイル状とも呼ばれる透明な卵のうに包まれ、枯れ枝や落ち葉、石の下又は水中の草などに付着させる。1対の産卵数は50～120個で、約3ヶ月で変態し上陸する。

特記事項

カスミサンショウウオには複数の隠蔽種の存在が指摘されていたが、形態や遺伝子解析などにに基づき、岡山県に分布するものはセトウチサンショウウオに分類された (Matsui et al. 2019)。

文献 比婆科学教育振興会 (1996), 金森他 (2019), Matsui et al. (2019), 岡山県 (1980), 関 (2018), 内山他 (2002), 山田 (2006) (山田 勝・江田伸司)

チュウゴクブチサンショウウオ*Hynobius sematonotos* Tominaga, Matsui et Nishikawa, 2019

有尾目 サンショウウオ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：未確定

選定理由

岡山県北部の山地溪流と、県中部の人家に近い里地・里山環境のなかにある小溪流にも生息しているが、まとまった森林伐採、林相変化、川相変化、河川開発などにより人知れず消失するリスクが高い。

形態

小型の流水性サンショウウオで、全長80 mm～120 mm。体色は背面から腹面にかけて赤紫色の地色に銀白色の雲状斑紋が入るが、個体変異も多くみられる。

ヒダサンショウウオは背面の斑紋が黄色で腹面に模様のないことで本種と識別できる。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、本州の中国地方に分布する。岡山県内では主に北部の山地溪流に生息するが、中部の溪流にも飛び地的に生息地がある。

生息状況

岡山県内での繁殖は4月下旬から5月中旬に河川源流部のガレ場にある流水中の転石下で行われる。産卵期は同所的に生息するヒダサンショウウオより約1ヶ月遅い。卵のうは1対のパナナ状で、表面にしわがある。1対の卵数は約10～20個。8月ころ変態し上陸する。

特記事項

Tominaga et al. (2019) により中国地方のブチサンショウウオはチュウゴクブチサンショウウオに分類された。

文献 比婆科学教育振興会 (1996), 金森他 (2019), 岡山県 (1980), 関 (2018), Tominaga et al. (2019), 内山他 (2002), 山田 (2009) (山田 勝・江田伸司)

ヒダサンショウウオ*Hynobius kimurae* Dunn, 1923

有尾目 サンショウウオ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

岡山県内では、おおむね津山盆地や新見盆地以北の山地溪流に比較的広く分布するが、森林伐採、林相変化、河川開発、林道開発などによる生息環境の大幅な改変により、徐々に生息地が減少している。

形態

小型の流水性サンショウウオで、全長80 mm～150 mm。背面の体色は紫褐色で、背面には黄色の地衣状斑紋があるが腹面にはない。幼生は指先に流水性サンショウウオの特徴である爪を持つ。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、関東地方から中国地方にかけての山地溪流付近に生息する。

岡山県内では北部の標高400 m以上の溪流のみで確認されているが、局所的である。

生息状況

岡山県内での繁殖は、3月中旬から4月上旬に河川源流部で行われる。産卵はガレ場状に転石が積み重なった、流水中の石の下などで行われる。卵は1対のバナナ状の卵のうに包まれており、1対の卵数は10～20個である。卵のうは極めて丈夫で虹色の光沢がある。8月ころ変態・上陸するが、幼生のまま越冬する個体もいる。

文献 比婆科学教育振興会 (1996), 金森他 (2019), Matsui et al. (2019), 岡山県 (1980), 関 (2018), 内山他 (2002), 山田 (2006)

(山田 勝・江田伸司)

ヒバサンショウウオ*Hynobius utsunomiyaorum* Matsui et Okawa, 2019

有尾目 サンショウウオ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：未確定

選定理由

岡山県内では、中国山地の脊梁部とその周辺の一部に生息が確認されているが、生息地は局所的で個体数も限られる。森林伐採、林相変化、林道開発、河川開発などの影響を受ける。

形態

小型の止水性サンショウウオで、全長80 mm～100 mm。背面は暗紫色で、体の側面と腹面には青白色の地衣状斑紋が顕著であるものが多く、尾は棒状である。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、兵庫県・岡山県・広島県・鳥取県・島根県に分布する。岡山県内では、広島・鳥取・兵庫県境に近接する一部地域に生息が見られる。

生息状況

繁殖期は3月下旬から5月で、産卵は山地の湧き水近くの小さな湿地や、細い流れの始まりなどの窪みで行われる。卵のうは1対のコイル状で、1対の卵数は約20～50個。幼生は9月上旬までに変態・上陸するが、幼生のまま越冬し翌年変態する個体もいる。

特記事項

カスミサンショウウオには複数の隠蔽種の存在が指摘されていたが、形態や遺伝子解析などにに基づき、岡山県に分布するカスミサンショウウオ高地型とされていたものは、ヒバサンショウウオに分類された (Matsui et al. 2019)。

文献 比婆科学教育振興会 (1996), 金森他 (2019), Matsui et al. (2019), 岡山県 (1980), 関 (2018), 内山他 (2002), 山田 (2006)

(山田 勝・江田伸司)

シコクハコネサンショウウオ *Onychodactylus kinneburi* Yoshikawa, Matsui, Tanabe et Okayama, 2013

有尾目 サンショウウオ科

●岡山県：情報不足 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

現在、岡山県内では苫田郡鏡野町の1ヶ所のみで分布が確認されており、生息地、個体数とも限定されると考えられるが、情報量が乏しい。

形態

小型の流水性サンショウウオで、全長160 mm～180 mm前後。背面は黒褐色で橙色や黄色の帯状斑紋を持つが腹面は淡色である。中国地方で同所的に見られるハコネサンショウウオとは、胸部に1対の暗色斑紋がないことで識別できる。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、徳島県、愛媛県、高知県、岡山県、広島県、山口県に分布する。県内での記録は非常に少ないが、自然林の残る河川源流部とその周辺に生息していると考えられ、今後の精査が必要である。

生息状況

岡山県内での産卵時期はハコネサンショウウオ同様、5月から6月にかけてと推察される。産卵環境もほぼハコネサンショウウオと同様で、山地の源流域にある伏流水中と考えられる。

特記事項

Yoshikawa et al. (2013) により新種記載された。

文献 比婆科学教育振興会 (1996), 金森他 (2019), 岡山県 (1980), 関 (2018), 内山他 (2002), 山田 (2006), Yoshikawa et al. (2013)

(山田 勝・江田伸司)

ハコネサンショウウオ*Onychodactylus japonicus* (Houttuyn, 1782)

有尾目 サンショウウオ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

県北部の高標高域の冷涼で湿潤な山地溪流に限って生息するが、岡山県内での生息地は多くない。森林伐採、林相変化、林道開発、河川改修・川相変化などの影響により絶滅する可能性が高い。

形態

小型の流水性サンショウウオで、全長130 mm～190 mm前後。体色の地色は黒褐色や褐色で、背面に褐色や朱色の帯状模様や斑紋がある。胸に左右1対の暗色斑紋があることでシコクハコネサンショウウオと区別される。成体でも肺を持たず皮膚呼吸で生活する。幼生は指先に流水性サンショウウオの特徴である爪をもつ。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、東は茨城県、北は新潟県、南は和歌山県、西は山口県に囲まれた本州に生息する。岡山県では県境付近源流部の水温の低い山地溪流に限られる。

生息状況

岡山県内での繁殖は、山地溪流の石の下の細流や伏流水中などで5月下旬から6月上旬に行われていると考えられているが、確認されていない。変態・上陸までに2年以上を要する。

文献 比婆科学教育振興会 (1996), 金森他 (2019), 岡山県 (1980), 関 (2018), 内山他 (2002), 山田 (2006), Yoshikawa et al. (2013)

(山田 勝・江田伸司)

オオサンショウウオ*Andrias japonicus* (Temminck, 1836)

有尾目 オオサンショウウオ科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

県内では河川の上流～中流に生息し、河川上流部の川岸の横穴や堤・大きな石の下の空間などで産卵するが、河川開発、用水路の改修、川相変化などによる影響を受け、すみかが壊され、河川の随所に設けられた堰堤などにより移動が制限され、生息地の消失と個体数の減少が顕著である。

形態

全長は600 mm～700 mmのものが多く、1500 mm以上で重量も35kgに達する個体もいる。世界最大級の両生類である。頭部は扁平で大きい、目は小さい。体には多数の小さなイボを持つ。背面は暗褐色で不規則な黒色模様が入るが模様はバリエーションに富む。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、岐阜県以西の本州と四国、九州の一部に分布する。岡山県では北部の河川や用水などに生息する。

生息状況

産卵は8月～9月にかけて行われる。大型の雄が繁殖巣穴を占有し雌を待つ。雌は100～500個のクリーム色の卵を数珠状につなげて産卵する。雄はそのまま巣穴に留まり幼生を保護する。約7週間で孵化し、4年ほどで変態する。飼育下では51年生きた記録があるが、さらに長く生きると考えられている。

関係法令の指定状況

国際希少野生動物種・特別天然記念物・オオサンショウウオ生息地（真庭市）。

特記事項

チュウゴクオオサンショウウオとの交雑個体が確認されているが、チュウゴクオオサンショウウオの個体は未確認である。

文献 比婆科学教育振興会（1996）、金森他（2019）、岡山県（1980）、関（2018）、内山他（2002）

（山田 勝・江田伸司）

アカハライモリ*Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)

有尾目 イモリ科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧(NT)

選定理由

県内には広く分布するが池沼開発、河川開発、圃場整備、水質汚濁、農薬汚染、田溝のコンクリート化などの影響を受ける。山際水田の耕作放棄による水場の消失や乾燥化により、県南部の丘陵地での減少が顕著である。

形態

全長は70 mm～130 mm。背面は黒色または黒褐色で、腹面は赤褐色と黒褐色の不規則な斑紋があるが、個体変異が大きい。体表には小さなイボがある。雄の尾は先端近くまで幅広く、雌の尾は全体に細く先端に向かい徐々に細くなる。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。岡山県では南部の平野部を除き全域に分布する。中北部には普通に見られるが、南部の丘陵地などでは減少が著しい。モリアオガエルの産卵する池や溜りなどでは、幼生をねらって多数の個体が集まる場面も見られる。

生息状況

繁殖期は4～7月で、卵を一粒ずつ水草などに、後肢を使い折りたたむように包み込む。求愛行動は、雄が雌の前で尾を曲げて小刻みに振り、雌に気に入られると雄は精包（精子塊）を雌の前に落とし、雌はこれを総排出腔から取り込む。受精は産卵時に行われる。孵化後3～4ヶ月で変態上陸する。

文献 比婆科学教育振興会（1996）、金森他（2019）、岡山県（1980）、関（2018）、内山他（2002）

（山田 勝・江田伸司）

ニホンヒキガエル*Bufo japonicus japonicus* Temminck et Schlegel, 1838

無尾目 ヒキガエル科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

選定理由

岡山県内に広く分布するが、森林伐採や土地造成、林相変化、池沼開発などにより個体数が減少している。特に県南部で生息場所や産卵場所が減少し、平地ではほぼ確認できない。

形態

がっしりとした体型の大型のカエルで、体長70 mm～150 mm前後。体色は基本的に褐色であるが、黄色みの強いものや赤みの強いものなど変異が多い。皮膚には大小の隆起があるが、繁殖期には比較的滑らかになる。耳腺は大きく膨らむ。鼓膜は明瞭で比較的小さく、直径は眼と鼓膜の距離とほぼ等しい。動作は緩慢で、跳躍力が弱い。



撮影：山田 勝

分布

日本固有亜種で、本州南西部・四国・九州に分布する。岡山県では全域に分布する。戦前には南部の平地でも普通に見ることができた。

生息状況

丘陵地の平地から山地の林床で生活し、主に夜間に行動し、小動物を捕食する。産卵は主に2～3月ころ池や沼、田溝などの水深の浅い止水中で雌雄が集まって行われる。卵は直径約2 mmで、約6,000～14,000個が長さ数mに及ぶ透明な筒状の卵のうに包まれている。幼生は黒っぽく、約3か月後に変態、上陸する。

関係法令の指定状況

岡山県自然保護条例による自然環境保全地域（鯉ヶ窪地域）で保護すべき種。

文献 前田・松井（2003）、松井（2016）、岡山県（1980）

（江田伸司・山田 勝）

タゴガエル*Rana tagoi tagoi* Okada, 1928

無尾目 アカガエル科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

山間の小溪流に生息しているが、森林伐採や林相変化、道路工事（林道工事）などにより個体数が減少している。

形態

中型のカエルで、体長40 mm～50 mm。背面は赤褐色で、ほぼ平滑。吻端から眼の後方にかけて黒い帯状の斑紋がある。腹面は大小の黒色の斑点が密集し、汚れた印象を受ける。水かきの発達が悪い。繁殖期の雄は体側の皮膚が伸びて膜状になる。繁殖期の異なる2集団が確認されており、今後の分類学的精査が必要である。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、本州・四国・九州に分布する。岡山県では中北部に分布する。

生息状況

山地の小溪流付近に生息し、小動物を捕食する。産卵は1～6月ころ伏流水中で行われ、直径3 mm～4 mmと大きめで約60～100個と少数の卵を卵塊として産み付ける。

関係法令の指定状況

岡山県自然保護条例による岡山県自然環境保全地域（鯉ヶ窪地域）で保護すべき種。

文献 前田・松井（2003）、松井（2016）、岡山県（1980）

（江田伸司・山田 勝）

ナガレタゴガエル*Rana sakuraii* Matsui et Matsui, 1990

無尾目 アカガエル科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：該当なし

選定理由

岡山県内では北部に分布するが、これまで確認された生息地は数か所のみで、個体数も極めて少なく、森林伐採や河川開発、道路工事（林道工事）などにより瞬く間に消滅する危険性が高い。

形態

中型のカエルで、体長40 mm～70 mm前後。体色は茶褐色。背面は平滑。吻端から眼の後方にかけて黒い帯状の斑紋がある。後肢の水かきはよく発達する。繁殖期には皮膚が弛み、特にオスは木の葉状になる。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、本州（関東地方・中部地方・北陸地方・近畿地方・中国地方）に分布する。岡山県では2007年11月に苫田郡鏡野町で初確認された。岡山県では北部の数か所に局所的に分布する。

生息状況

山地の溪流近辺の林床で生活すると考えられるが、非繁殖期の詳しい生態は不明である。雌雄とも秋季に水中に入り、越冬と繁殖は水中で行われる。産卵は主に3～4月ころ行われ、水中の石の下などに100個前後の卵塊として産み付ける。

関係法令の指定状況

岡山県希少野生動植物保護条例による指定希少野生動植物。

文献 前田・松井（2003）、松井（2016）、岡山県（1980）、山田・江木（2007）

（江田伸司・山田 勝）

ナゴヤダルマガエル*Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)

無尾目 アカガエル科

●岡山県：絶滅危惧Ⅰ類 ●環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

選定理由

河川開発や圃場整備、土地造成、水質汚染、農作業の変化などにより、本来の生息地である低湿地帯が減少し、さらにその代替地である水田は乾田化や田溝の変容などが進行しており、個体数・生息地ともに激減している。

形態

中型のカエルで、体長40 mm～60 mm。一見トノサマガエルに似ているが、四肢がやや短く、ずんぐりした体型。背面には正中線がなく、黒色の丸く孤立した斑紋があり、棍棒状の隆起がある。体色は茶褐色のほか、黄緑色、赤褐色、黒褐色で一部黄緑色など、変異が多い。腹部に雲状斑紋をもつ個体もいる。後肢の水かきは発達する。跳躍力は強くない。



撮影：山田 勝

分布

日本固有亜種で、本州（東海地方・中部地方南部・近畿地方中北部・山陽地方東部）・四国（香川県・愛媛県）に分布する。岡山県では南部を中心に中南部に分布するほか、北部の一部にも分布する。

生息状況

湿地や湿田、田溝など低湿地帯の水辺に生息し、小動物を捕食する。水辺からほとんど離れない。6～7月ころ浅い止水に直径約1.5 mmの卵を数個ずつ小さな卵塊として多数産む。湿った土中に潜って越冬する。

特記事項

岡山県を中心とする瀬戸内海沿岸産（岡山種族）と東海・近畿産（名古屋種族）は鳴き声や遺伝的な特徴が異なる。

文献 伊藤（2005）、前田・松井（2003）、松井（2016）、岡山県（1980）

（江田伸司・山田 勝）

トノサマガエル*Pelophylax nigromaculatus* Hallowell, 1861

無尾目 アカガエル科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：準絶滅危惧 (NT)

選定理由

水田との結び付きが強く、近年の稲作形態の変化などで減反や耕作放棄などによる水田の減少、繁殖期に湛水がされない、産卵場所ともなる苗代が作られないなどにより個体数・生息地ともに減少し、特に県南部の平地ではほとんど確認できなくなっている。

形態

中型のカエルで、体長60 mm～90 mm前後。一見ナゴヤダルマガエルに似るが、ややスマートで、四肢が長く跳躍力は強い。雄の背面は黄緑色で、淡黄色の正中線がある。雄は一对の鳴嚢をもつ。雌はやや大きく、背面は灰白色で、同色の正中線と一对の体側線があり、不規則な黒色の斑紋がある。腹面は乳白色で、斑紋がない。後肢の水かきはよく発達する。



撮影：山田 勝

分布

国内では本州（関東地方～仙台平野を除く）・中国・九州など、国外では中国北部・朝鮮半島・ロシア沿海州の一部などに分布する。岡山県では全域に分布する。

生息状況

水田と密接に結び付いて分布しているが、非繁殖期には水辺から離れた場所にも生息する。産卵は4～6月ころ、水田や水たまりなどの止水中で行われ、卵は直径1.5 mm～2.0 mm、1,000～3,000個の卵塊として産み付ける。2週間ほどでふ化し、2～3か月で変態、上陸する。

文献 前田・松井（2003）、松井（2016）、岡山県（1980）

（江田伸司・山田 勝）

シュレーゲルアオガエル*Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1858)

無尾目 アオガエル科

●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

湿地開発や圃場整備、土地造成などにより個体数・生息地ともに減少している。

形態

中型の樹上性のカエルで、体長は雄が約35 mm、雌はやや大きく約50 mm。背面は黄緑色で、まれに黄色の小斑点をもつ個体がある。皮膚は顆粒状。腹面は淡灰色で、下顎や体側などに暗褐色の小斑点がある。指先には吸盤がある。

水かきはあまり発達しない。虹彩は黄色で赤みがない。鼓膜は明瞭でやや小さく、眼径の半分よりやや小さい。雄は喉に単一の鳴嚢をもつ。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で、本州・四国・九州に分布する。岡山県では全域に分布するが南部での分布は局所的である。

生息状況

平地から山地の湿地や水田などに生息し、主に昆虫やクモなどの小動物を捕食する。5～6月ころ水際の土の中や草の下、背丈の低い草の中などに白い泡状の卵のうを作り、直径約2 mmの卵を300～600個前後を産む。幼生は卵のうを溶かす酵素を出し、流れ出して水中生活を始める。同様の卵のうを樹上に産み付けるモリアオガエルが有名であるが、産卵習性としては本種がより特異と言える。

文献 伊藤（2005）、前田・松井（2003）、松井（2016）、岡山県（1980）

（江田伸司・山田 勝）

モリアオガエル*Pelophylax arboreus* (Okada et Kawano, 1924)

無尾目 アオガエル科

●岡山県：絶滅危惧Ⅱ類 ●環境省：該当なし

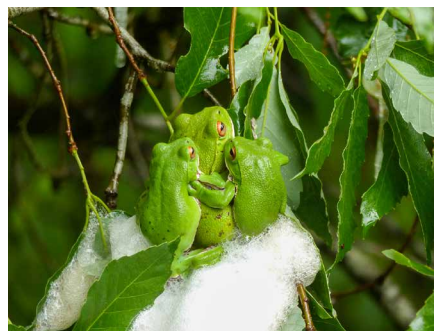
選定理由

森林伐採や林相変化，湿地開発，池沼開発，水質汚濁，山際の水田の耕作放棄などにより個体数・生息地ともに減少している。

形態

中型の樹上性のカエルで，体長50 mm～90 mm前後。雄より雌が大きい。

皮膚はやや強い顆粒状。背面の色は黄緑色から暗緑色まで変異が大きく，黒色や茶褐色の不規則な斑紋をもつ個体が多い。腹面は乳白色で，顎や体側に黒褐色の小斑点がある。鼓膜は明瞭でやや大きく，眼径の半分かやや大きい。指先には吸盤があり，水かきは発達する。雄は咽頭下に単一の外鳴囊をもつ。虹彩は黄色で赤みがかる。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で，本州・中国・九州に分布する。岡山県では主に中北部に分布するほか，県東部では南部の一部にも分布する。

生息状況

丘陵地から山地の林内の樹上で生活し，主に昆虫やクモなどの小動物を捕食する。6～7月ころ夜間に池や湿地などに雌雄が集合して水面上に張り出した木の枝に白い泡状の卵のうを作り，中に直径約2 mm～3 mm，150～200個の卵を産む。卵のうは水際の地表近くに作られることもある。幼生は卵のうを溶かす酵素を出し，流れ落ちて水中生活を始める。2か月ほどで変態，上陸する。

文献 前田・松井（2003），松井（2016），岡山県（1980）

（江田伸司・山田 勝）

カジカガエル*Buergeria buergeri* (Temminck et Schlegel, 1838)

無尾目 アオガエル科

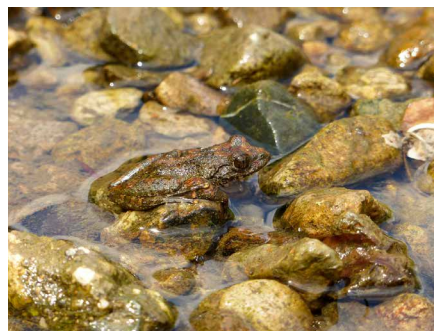
●岡山県：準絶滅危惧 ●環境省：該当なし

選定理由

山間の溪流に生息するが，河川開発や林相変化，ダム建設，水質汚濁などにより個体数・生息地ともに減少している。

形態

中型の樹上性のカエルで，体長は雄が約30 mm～40 mm，雌は大きく約60 mm～70 mm。背面は暗褐色で不規則な黒色の斑紋がある。皮膚はやや強い顆粒状で，多数の小さな隆起がある。腹面は淡灰色で，下顎や体側などに暗褐色の小斑点がある。指先には吸盤がある。後肢の水かきは発達する。鼓膜は明瞭でやや小さく，眼径の半分かやや大きい。雄は喉に単一の鳴囊をもつ。



撮影：山田 勝

分布

日本固有種で，本州・四国・九州に分布する。岡山県では吉井川・旭川・高梁川水系などの河川上中流域に分布する。

生息状況

山間の溪流付近に生息し，樹上で主に昆虫やクモなどの小動物を捕食する。6～7月ころ，雄は溪流の水面上に出た石の上で鳴く。産卵は水中の石の下などで行われ，直径約2.5 mmの卵500個前後を卵塊として産む。幼生は口器が大きく発達し，水中の石に吸い付き，表面に生えている藻類を食べて成長する。美しい鳴き声を楽しむため古くから愛玩飼育されてきた。

関係法令の指定状況

文化財保護法による天然記念物「湯原カジカガエル生息地（真庭市）」。

文献 伊藤（2005），前田・松井（2003），松井（2016），岡山県（1980）

（江田伸司・山田 勝）

主な参考文献

- 比婆科学教育振興会編, 1996. 広島県の両生・爬虫類. 163pp. 中国新聞社, 広島. 伊藤邦夫, 2005. 岡山県をはじめとするダルマガエルの生息状況. 生物研究第44巻第1号. 3-13. 日本生物会教育会.
- 金森さりい・藤林真・砂場千奈・亀崎直樹, 2019. 岡山県における両生爬虫類相. *Naturalistae* 23:31-37. 岡山理科大学, 岡山.
- 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生動物－レッドデータブック－(脊椎動物編). 331pp. 財団法人野生生物研究センター, 東京.
- 環境庁編, 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生動物－レッドデータブック－(爬虫類・両生類). 120pp. 財団法人自然環境研究センター, 東京.
- 前田憲男・松井正文, 2003. 改定版日本カエル図鑑. 223pp. 文一総合出版, 東京.
- 松井正文, 2016. 日本のカエル. 255pp. 誠文堂新光社, 東京.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa & A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology* 38(1):32-90.
- 日本爬虫両棲類学会標準和名委員会, 2018. 日本産爬虫両生類標準和名リスト2019年6月26日版, 日本爬虫両棲類学会ホームページ. http://www.herpetology.jp/wamei/index_j.php
- 岡山県編, 1980. 岡山県の両生・爬虫類. 92pp. 岡山県環境部自然保護課, 岡山.
- 岡山県編, 1993. おかやまの自然第2版. 332pp. 岡山県環境保健部自然保護課, 岡山.
- 岡山県編, 2003a. 岡山県野生生物目録. 397pp. 岡山県生活環境部自然環境課・岡山県環境保全事業団, 岡山.
- 岡山県編, 2003b. 岡山県版レッドデータブック－絶滅のおそれのある野生生物－. 465pp. 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山.
- 岡山県編, 2009. 岡山県野生生物目録. 378pp. 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山.
- 岡山県編, 2010. 岡山県版レッドデータブック2009. 416pp. 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山.
- 関慎太郎, 2018. 野外観察のための日本産両生類図鑑第2版. 205pp. 緑書房, 東京.
- 千石正一編, 1979. 原色／両生・爬虫類. 206pp. 家の光協会, 東京.
- Tominaga, A., M. Matsui, & K. Nishikawa, 2019. Two new species of lotic breeding salamanders (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from western Japan. *Zootaxa* 4550(4):525-544.
- 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関 慎太郎, 2002. 日本の両生爬虫類. 10-157. 平凡社, 東京.
- 山田 勝, 2006. 岡山県におけるサンショウウオ科の生息状況について. 岡山県自然保護センター研究報告(14). 1-13. 岡山県.
- 山田 勝・江木寿男, 2007. 岡山県におけるナガレタゴガエル(カエル目, アカガエル科)の新産地. 岡山県自然保護センター研究報告(15). 17-20. 岡山県.
- Yoshikawa, N., Matsui, M., Tanabe, S. & Okayama, T., 2013. Description of a new salamander of the genus *Onychodactylus* from shikoku and western honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa* 3693(4):441-464.